

## 寄木細工、畑宿の集落、一里塚

江戸（現在の東京）と京都を結んだ旧東海道沿いに位置する畑宿の集落は、寄木細工発祥の地です。埋め木細工の形式の寄木は、様々な種類の木材を様々な形の棒に切り出し、そのたくさんの棒を1つにまとめ、しばしば接着剤で固定して、断面に幾何学模様を作り出すというものです。模様が現れた断面は、希望の長さに切ることができ、鉋を使って、0.2ミリ程度の薄さのシートに削り出すこともできます。このような薄片やシートは、箱、日用品、その他のアイテムを作るのに使われます。正しい順番で側面を押し引きしなければ開けられない秘密箱（パズルボックス）は、寄木細工の人気アイテムです。別の手法として、薄板を切り出したり、シートに削り出したりせずに、棒を束ねたものに彫刻を施したり、旋盤で挽いて、コップやお皿などのアイテムを作ることもできます。

寄木を発案したのは石川仁兵衛（1790年-1850年）という畑宿の職人で、箱根で手に入る幅広い木材を使って自身の作品で様々な色や色調を表現しました。

この技術がいつ生まれたのかは正確にはわかりませんが、1826年には、ドイ

ツの植物学者フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796–1866）が箱根を巡る旅の記録の中で、これについて書いています。寄木の技術は年を経て著しく進歩し、現在ではより多様な色を表現するために、輸入木材も使われていますが、工芸品自体は現在も熟練の職人の手によって制作されています。石川仁兵衛の子孫が経営する工房兼店舗の浜松屋では、仕事をしている職人を見学し、製品を購入することができます。

江戸時代（1603–1867）でも東海道沿いの小さな外れだった畑宿では、現在でも約 12 人の寄木職人が生活し、働いています。工房の他には、村は一里塚、つまり、1 里の距離を示す標識で有名です。これらは、江戸時代初期の数年間、間に整備された街道システムや宿場町の一部として徳川幕府が設置したマイルストーンのような一連の土手のことです。1 里（3.93 キロ）ごとにこのような 1 組の塚があり、畑宿にあるものは、考古学調査に基づいて、江戸から 23 里を示すものとして再建されたものです。一里塚は、旅行者にどのくらい遠くまで来たのかを示したのと同時に、塚の上には木が植えられていたため、様々な要因から逃れられる空間も提供していました。